

看護学部における実習の概要：小児看護学編

吉武香代子
宮川 喜代

兼松百合子
西川 陽子

I. はじめに

本学部における小児看護学に関する実習は、見学、学内実習、見学実習、領域別実習Ⅱおよび総合実習（フィールド選択）によって構成されている。現在はまだ1回生の実習を終了したところであるが、ここに第1回の実習について記述し、今後の検討に役立てたい。

II. 見学・学内実習および見学実習

3年次の7月、まず小児看護への導入として国立小児病院を見学した。学生にとって、小児医療が専門に行われている病院ははじめてであり、病院における小児看護の役割を考える出発点となることを期待した。

学内実習は調乳をはじめ小児看護の基礎技術を中心に、3回の実習を行なった。

翌年2月には、千葉市内の4つの保育園において、主として3才未満の健康児の観察と世話の実習を1日行なった。学生は寒風の中での戸外のあそびや給食の世話を通じて健康な小児と接し、健康児の特徴を把握するとともに、のちに病児との相違を考える基礎となった。

同時期に、国立療養所下志津病院において長期入院を要する小児の看護の実習を1日行なった。学生は進行性筋ジストロフィー、重症心身障害、喘息および慢性腎疾患の8つの病棟に3～4人ずつ分かれて実習した。これが、学生がユニフォームを着て行う最初の実習であり、長期入院の小児の看護の特殊性とともに、それぞれの疾患をもつ小児の特殊性と問題点をあわせて学ぶことができた。

III. 領域別実習Ⅱ

主として千葉大学医学部付属病院母子棟3階（小

小児看護学講座

児科および小児外科病棟）において、小児看護学の学習を基礎として、小児看護に必要な知識と技術を習得し、小児看護の役割を理解して、小児と母親に適切な看護が実践できる能力と態度を養うことを目的として行なった。実習には教官4名全員が指導にあたったが、助手2名が中心となり、実習開始前から病棟において1ヵ月以上の研修を行なって実習開始に備えた。実習計画表（表-1）に示すように、病棟における実習9日間を前期7日間と後期2日間とに分け、ひとりの学生が小児科と小児外科の両方で実習できるようにした。

実習開始前、教室においてオリエンテーションを行なった。実習目的・目標、実習内容、経験項目、実習場所および必要な記録物の説明をした。また、paper patientを用いて看護計画のたて方および看護記録の書き方について演習を行なった。沐浴や点滴の管理、保育器の操作その他の看護技術については自由に復習できるようにした。

受持患児は、指導教官が手術前後の患児や入院後日の浅い患児など、症状が観察しやすく特に看護を必要としている患児を選んだ。また、グループ全体で代表的な小児疾患患児の看護と、いろいろな年令の患児の看護を学ぶことができるよう配慮した。受持患児は他校の実習生との重複をさけ、病棟婦長の了承を得て決定し、実習2～3日前に学生に提示した。学生は疾患とその年令の成長発達および一般的な看護について予習し、実習第1日目に提出することとした。

実習は受持患児の看護を中心に、看護計画をたてて看護を行なった。患児と学生の状態によって第2の受持患児を受持つこともあり、この場合はなるべく同室で年令や疾病の異なる患児とし、受持患児で学習できないことを補うよう努めた。受持患児の例は表-2のとおりである。さらに経験

表1 実習計画表 (例)

学生 月・日	△ Ko	Ka	△ Ho	T	Y	△ S	I	Sa	Hu	カンファレンス 予定 45分
10/16月										15:45~16:30
10/17火										13:30~14:15
10/18水	外来	外来	内科					外科		13:30~14:15
10/19木			外来	外来	外来					13:30~14:15
10/20金						外来	外来			13:30~14:15
10/23月								外来	外来	15:45~16:30 (合同)
10/24火										15:45~16:30 (合同)
10/25水										15:45~16:30
10/26木			外科					内科		15:45~16:30 (合同)
10/27金	幼稚園									
10/28土	まとめ									

△印は男子学生

表2 受持患児 (例)

例1 女子学生	例2 男子学生
1才男MCLS(川崎病)	1.5ヶ月男肥厚性幽門狭窄症術後
5才急性骨髄性白血病	8ヶ月男鎖肛人工肛門閉鎖術直前
3ヶ月男総胆管のう腫(術前)	10才男急性白血病(分類不能)

できない事項については、指導教官が機会をつくりできるだけ経験できるようにした。後期2日間は学生間で受持ちを交代する形をとった。交代時は申送りを行い、看護の要点を伝えることと、他の学生のたてた看護計画にもとづいて看護することの学習とした。

毎日の実習記録はB5版の用紙1枚に記入し、主たる受持患児に行なった看護は原稿用紙15枚程度のケースレポートにまとめることにした。

外来実習は、主たる実習事項をあらかじめ提示したうえで、病棟における患児の受持ちは継続のまま、午前10~12時の2時間小児科外来で行なっ

た。実際に観察した事、感じた事について簡単に報告させたが、学生によって実習内容に差があり、実習方法については今後検討していきたい。

カンファレンスは、学生が受持患児の背景、看護計画および実施中の看護について抄録を示しながら紹介し、今後の看護について討議した。全員のケースをとりあげることができ、受持ち以外の患児の疾患や看護についても学習する機会となった。例を表-3に示す。実習最終日には、母子棟3階での看護をふり返って、たとえば検温の方法や付添いの事など、学生の感じたことを中心に小児看護のあるべき姿について話し合った。

病棟での実習終了後、加曾利幼稚園において、健康な幼児の成長発達過程の理解と、集団における遊びの指導や日常生活指導について学ぶことを目的とした実習を行なった。内容は、(1)行動観察：自由遊びの時間に1人の子供について15分間の行動を継続的に観察し記録する。(2)集団遊びの指導方法と子供達の反応について、(3)日常生活習慣の観察と指導方法について、(4)健康状態の把握と

処理についての4項目であった。レポートは上記内容のうち29人が(1)、10人が(2)、2人が(3)、2人が(4)、9人はその他のテーマを取り上げた。病児との比較において健康児の生活の特徴が再認識された。

実習終了後、各学生と個別に面接して実習内容やケースレポートなどについて助言し、記録物は返却した。

学生の評価は、評価項目(表-4に30項目中一部示す)、記録物、ケースレポート、出席、実習態度を総合して行なった。

考 察

実習の成果を検討するための評価項目でその達成状況を見ると表-4の通りであった。また、それを難易度で3段階Ⅰ、Ⅱ、Ⅲに分けてその達成状況を見ると、Ⅰでは83%、Ⅱでは77%、難度が高いと思われたⅢでも70%と高率であった。授乳、沐浴、計測など25の必須経験項目についてみると、殆ど全員が経験することができた。これらのことは、わずか2週間の実習ではあったが、学生の努力の結果として充分評価すべきことである。

出席率は99%以上であり、「小児の実習はたいへ

んだ」という意見もあったが非常に熱心な学生も少なくなかった。実習評価では、男子学生と女子学生の間には差がみられたが、これは小児の特殊性からきたものと思われる。全体の流れとして幼稚園実習を最後の1日に行なったことは、小児を広く理解するうえで効果があったと思われる。

IV. 総合実習

フィールド1：大学病院母子棟3階(兼松・西川)

母子棟3階の素材を出発点として、各自の希望を中心に創造的な実習体験をもつことを目的とする実習を行なった。

1人の学生は、慢性疾患の学童の心理面に着目して3人の学童を看護しながら、行動観察、面接、心理テストなどを行い、看護者が学童の心理的側面をよりの確に把握する方法について考察した。

2人の学生は、退院後の患児とその関係者を外来、家庭、学校などで観察し、地域に専門的な援助をする人が欠如していることを痛感した。

フィールド2：都立清瀬小児病院(吉武・宮川)

6人の学生が病院における小児看護の役割を学ぶことを目的として、内科、外科、腎および未熟

表3 カンファレンス (例)

月・日	内 科	外 科
10/16	テーマ 小児看護の特殊性	
10/17	ケースカンファレンス 白血病患児の看護	テーマ 手術前後の患児の看護
10/18	保育器収容中の髄膜炎患児の看護	ケースカンファレンス 臍帯ヘルニア患児の看護
10/19	點頭てんかん患児の看護	人工肛門閉鎖術後患児の看護
10/20	敗血症患児の看護	手術後、新生児の看護
10/23	先天性胆道閉鎖症患児の術後の看護	
10/24	黄疸のある患児の看護	
10/25	テーマ 小児科、小児外科の看護の相違	
10/26	反省会	
10/28	まとめ テーマ 小児看護のあるべき姿	

児病棟に分かれて実習した。付添いなしで入院している小児の看護と、チームの一員として看護に参加することの2つがねらいであり、学生は病棟看護婦とチームを組み、複数の患児の看護を行なった。小児の24時間の看護を学ぶために、準夜実習も1回ずつ行なった。指導教官は毎日約30分、各学生と個別に面接し、看護上の問題解決への助言を行なった。

この実習により、学生は小児看護への理解を深め、領域Ⅱ実習に積重ねる多くの新しい経験が得られた。同時に、看護計画を共有することなどチームワークの重要性を学ぶことができた。

V. おわりに

第1回の実習を終了して、2週間という短い期間の中で小児看護実習の目標を達成するために、教官もまた必死であったという感を抱く。看護学校の学生と実習場を共有する中で、学部の学生の実習として更にプラスすべきものを、今後検討していきたい。

学生を快く受入れて下さった大学病院母子棟3階およびその他の施設の方々に感謝する。

表4 評価項目と達成状況(抜粋)

項目番号	項目	ふつう以上の学生数	ふつう以上の学生の割合
1.	小児と自信をもって接し、小児に安心感を与えることができる	42人	81%
3.	適切な技術を用いて、身体発育、運動機能および精神発達について観察することができる	38人	73%
7.	受持ち小児に必要な世話を、適切な技術を用いて実施することができる	49人	95%
13.	小児と母親が、疾病を受入れ自身の力で克服できるように、援助することができる	34人	65%
22.	適切な技術を用いて、看護計画に基づいた看護を実践することができる	40人	77%
30.	行なった看護を正確に記録し、報告することができる	41人	79%

(学生総数 52)